

要項・提言原稿について

I 分科会の提言内容・研究の進め方

変化の激しい社会においては、生涯を通じて常に学び続ける姿勢が必要になってきており、家庭や地域との連携を進め、魅力ある学校をめざし共に育てていく視点が必要である。その推進役としての役割は、教頭・副校長が担っている。教頭・副校長の研究として、次の五点を研究の柱として取り組む必要がある。

- ・教頭・副校長としての関与性が明確な研究
- ・組織的で協働性のある研究
- ・客観的で継続性のある研究
- ・視点を明確にした鋭角的な研究
- ・教頭・副校長としての資質向上につながる研究

1 踏まえたい3つのポイント

- (1) 全公教第13期全国統一研究主題及び大会のサブテーマを踏まえた発表にする。
- (2) 提言領域は、全国共通課題（6課題）に沿って区分する。
- (3) グループ協議をしやすいするため、実践発表ではなく、ポイントをはっきりさせた提言型の発表にする。

2 研究の進め方の2つのポイント

- (1) 継続性・協働性・関与性（3C）に焦点を当てた実践的研究とする。
- (2) 全公教「研究の手引き」研究協議の視点に基づいて研究する。

II 分科会の提言者

- 1 分科会は、6課題10分科会とする。
- 2 第1課題から第5課題の1つの分科会は、全国提言1名、四国ブロック1名とする。
- 3 第6課題は全公教が主催し、運営は全公教総務部が行う。
- 4 特別分科会Ⅰ（全公教研究部主催）・特別分科会Ⅱ（開催地実行委員会主管）を開催する。

III 大会要項原稿のまとめ方

1 研究主題

- ・提言する課題を具体的に表示すること。
- ・全公教第13期全国統一研究主題及び大会のサブテーマを踏まえ、提言する分科会の領域に基づいて設定する。

2 サブテーマ

- ・研究主題が大きい場合や方向性を示す場合、サブテーマを設定し、研究内容をより具体的にしたり、焦点化したりすること。

3 主題設定の理由

- ・なぜ主題を設定したのか。主題設定の背景や課題性を簡潔にまとめる。

4 研究のねらい

- ・どのようなことが課題となっているのか。
- ・どのような方法で課題解決に取り組もうとしているのか。
- ・何を明らかにしようとしているのか。

5 研究の経過

- ・研究に取り組んだ経過及び取り組み内容を簡潔にまとめる。

6 研究の概要

- ・副校長・教頭として「いつ、誰に、何について、どのような関わり」を簡潔にまとめる。
- ・課題解決への具体的な方策について、量的・質的にも重視する。

7 研究の成果と今後の課題

- ・研究の成果と今後の課題を簡潔にまとめる。

8 協議の柱

- ・提言者研修会用には記載するが、大会要項には載せない。
(提言について、グループで協議する柱を1つ決めておく。)

提言原稿執筆要領①

I 字数・枚数について

- 1 体裁 20字×47行 2段組 A4判縦 横書き
- 2 原稿 使用ソフト「Word」によるワープロ原稿
- 3 ページ数 2ページ

II 執筆の仕方について（具体例も参照）

- 1 1ページ目 上部8行に次のことを記載する。
 - ※ 分科会名 研究課題「〇〇に関する課題」
 - ※ 提言の研究主題 及び 副題
 - ※ 提言者 〇〇県〇〇市教頭会 〇〇市立〇〇小学校 〇〇 〇〇

- 2 本文の開始 9行目より記載する。

3 提言項目

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 主題設定の理由（9行目から）2 研究のねらい3 研究の経過4 研究の概要5 研究の成果と今後の課題 <p>※上記5項目で項立てをお願いします。</p> |
|---|

- 4 フォント ポイント
※装飾等の体裁については、大会事務局で行いますので、見出し等にゴシック体や倍角文字等は使わず、標準字体のみで記載してください。

- 5 余白 上下・左右 20mm

- 6 文体 常体（〇〇である。 〇〇と考える。）

- 7 図・表等 見やすい大きさと 縮図も可
※写真は可

提言原稿執筆要領②

I 表記

第○分科会 研究課題「○○○○に関する課題」

研究主題 ○○○○○○○○
-サブテーマ ○○○○○○○○-

提言者○○県○○市（地区・町）教頭会○○市立○○学校○○○○

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1 主題設定の理由 | 4 研究の概要 |
| 2 研究のねらい | |
| 3 研究の経過 | 5 研究の成果と今後の課題 |

II 原稿への依頼事項

1 研究主題について

- (1) 全公教第13期全国統一研究主題をふまえ設定する。
- (2) できるだけ具体性をもった研究主題とする。

2 副題について

- (1) 研究主題が広義の場合や研究の意図・方向性を示す場合に副題を設定し、具体化する
- (2) 研究内容を端的に表すものとする。

3 主題設定の理由

- (1) 主題設定に至った背景、経過、地域性等々、課題との関係を考慮し、記述する。
- (2) 全公教編集による「研究の手引き」を参考にする。

4 研究のねらい

- (1) 主題に対し、何をどのように迫ろうとしたのかを明確に記述する。
- (2) 課題や研究主題をふまえて、記述する。

5 研究の経過

- (1) 研究に取り組んできた経過、取り組み内容を簡潔に記述する。

6 研究の概要

- (1) 研究の継続性・協働性・関与性を十分意図した記述をする。
- (2) 課題解明への取り組みが具体的にわかるように記述する。
- (3) 提言の中心となる部分であり、執筆量は十分取るようにする。

7 研究の成果と今後の課題

- (1) 研究で明らかになったことや新たな課題を簡潔にまとめる。

8 原稿の内容確認と校正

- (1) 必要に応じて、提言者に連絡を取り、内容確認および原稿の書式や表記、誤字脱字等について校正をします。

9 原稿提出について

提出方法 下記提出先に電子メールで提出してください。
電子メールの件名は
〔高知大会第〇分科会提言原稿 〇〇立〇〇小(中)〇〇〇〇〕とする。

原稿締め切り日 令和5年11月24日(木)必着
(12月1日に原稿データを全公教に送付)

原稿提出先	高知県小中学校教頭会 大会実行委員会事務局 〒781-2120 高知県吾川郡いの町枝川 2410-7 中部教育事務所3階 TEL: 088-881-2393 / FAX: 088-881-2635 E-mail kochi@kyotokai.org
-------	--

表記について

- 1 本文は、「だ」「である」などの常体を用い、横書きにする。
- 2 文章においては、できるだけ専門用語を避け、校種や専門教科が違っていても理解できるよう、平易な言葉を使用する。
- 3 漢字や仮名遣いについては、「常用漢字」「現代仮名遣い」を基本とし、外来語や外国の人名・地名等には片仮名を使用する。本文中における漢字表記と仮名表記の不一致は避ける。
- 4 句点は「。」 読点は「、」を使用する。
- 5 「1年生」「3学期」「6組」など順番や表示を表すものは算用数字、「一つ」「一人」など熟語として用いられるものは漢数字を使用する。
- 6 「常用漢字表」にない漢字については、ふりがなを付けて用いることを基本とする。
ただし、日常よく使われるものについては、ルビを振らない場合もある。

【表記の具体例】

あいさつ → 挨拶

…にあたって → …に当たって

あたりまえ → 当たり前

あとで → 後で

在り方 → 在り方

あるいは → あるいは（×或いは）

…ということ → …ということ

（×…と言うこと）

裏付ける → 裏付ける

…していく → …していく

（×…して行く）

いくつか → 幾つか

いっそう → 一層

いろいろ → いろいろ

いわば → いわば

うながす → 促す

おおいに → 大いに

おこなう → 行う

おとな → 大人

おもしろい → おもしろい

および → 及び（接続詞）

…におよぶ → …に及ぶ

かかわる → 関わる

3か月、2かしょ → 3か月、2か所

きたる5月13日 → 来る5月13日

きづく → 気付く

…ください → ください

（○…資料を下さい）

こころがける → 心掛ける

ことば → 言葉

こども → 子供

こどもたち → 子供たち

1時間ごと → 1時間ごと（×1時間毎）

…ころ → …頃

computer → コンピュータ

（×コンピューター）

さまざま → 様々

さらに → 更に（副詞の場合）

さらに（接続詞の場合）

じゅうぶん → 十分（×充分）

ずいぶん → 随分
すなわち → すなわち (×即ち)
すでに → 既に
すべて → 全て
だいたい → 大体
…たち → …たち
ともだち → 友達
…のため → …のため (×…の為)
だれ → 誰
…づくり - …づくり (×作り)
つちかう → 培う
つながる → つながる (×繋がる)
できあがる → 出来上がる
…できる → …できる (×出来る)
てだて → 手だて
ドッジボール → ドッジボール
…とともに → …とともに (×…と共に)
…ととらえる → …ととらえる
(×…捉え等)
虫をとらえる → 虫を捕らえる
○や△とう → ○や△等
…するなど → …するなど (×…する等)
なお → なお (×尚 ×猶)
はぐくむ → 育む
はたらきかける → 働きかける
ひとりひとり → 一人一人
ふしぎ → 不思議
ふまえて → 踏まえて
ふりかえる → 振り返る
ふれあい → 触れ合い
または → 又は (接続詞)
まったく → まったく (全く 可)

みいだす → 見いだす
みとる → 見取り、見て取る
みにつける → 身に付ける
めあて → 目当て (めあて)
めざす → 目指す
もちろん → もちろん (×勿論)
もっぱら → もっぱら (×専ら)
…しやすい → …しやすい (×…し易い)
…するように → …するように
(×…する様に)
よさ → よさ (×良さ)
わかる → 分かる (×解る ×判る)
わきあがる → 沸き上がる わき上がる
(×湧き上がる)
わずか → わずか (×僅か)
わたくし → 私
わたし → 私
わたしたち → 私たち (×私達)
わりあい → 割合
わりあて → 割当て
われら → 我ら (×我等)
われわれ → 我々 (×吾々)
わんぱく → 腕白

補 助 資 料 に つ い て

高知大会実行委員会研究部

補助資料を作成する場合は、下記要領にて準備してください。

1 補助資料原稿について

- (1) A4版の横書きを基本とします。
- (2) 資料は必ずホッチキスで留めて合本とし、分散しないようにしてください。
- (3) 表紙には、分科会名・単位教頭会名・学校名・提言者名などを記載してください。

第66回全国公立学校教頭会研究大会高知大会 第〇分科会 補助資料 提言者 〇〇県〇〇市教頭会 〇〇〇立〇〇〇学校 〇〇 〇〇

- (4) 提出部数については、現地参集での部会参加予定数（後日に連絡）+ 50部です。
- (5) オンライン参加の参加者には、補助資料データをメール添付又は大会HPからダウンロードにて配付しますので、補助資料データをメール添付にて大会事務局に送信してください。

2 提出について

- (1) 補助資料（印刷物・電子データどちらも）の送付先及び送付締切日について

【送付先】高知県小中学校教頭会 事務局

〒781-2120 高知県吾川郡いの町枝川 2410-7 中部教育事務所内

TEL 088-881-2393 / Fax 088-881-2635 / Mail kochi@kyotokai.org

【締切日】令和6年7月1日（月）厳守

※当日の持ち込みにつきましては対応しかねますので、必ず締切日までに送付してください。

- (2) 作成及び送付に係る費用について

・各地の教頭会の負担になります。ご了承ください。

- (3) 梱包

・段ボール箱等を使用するなど、確実に梱包を行い、当日までの運搬に支障のないようお願いいたします。

・梱包の外側には、「全公教高知大会第〇分科会補助資料在中（令和6年8月1日使用）」と明記しておいてください。

3 本件についての問合せ先

ご不明な点がありましたら、お手数ですが下記の連絡先までお問合せください。

【問合せ先】高知県小中学校教頭会 事務局

〒781-2120 高知県吾川郡いの町枝川 2410-7 中部教育事務所内

TEL 088-881-2393 / Fax 088-881-2635 / Mail kochi@kyotokai.org

令和5年7月3日

第66回全公教研究大会高知大会
各 提 言 者 様

全公教研究大会高知大会実行委員会
実行委員長 大坪 顕彦

第66回全公教研究大会高知大会の提言原稿の執筆について（依頼）

処暑の候、提言者の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度は、全公教研究大会高知大会分科会提言発表をご承引いただきありがとうございます。大会2日目の分科会での提言について、提言原稿の執筆をお願いいたします。

なお、令和5年9月11日開催の「執筆説明会」にて、全公教第13期全国統一研究主題ならびに高知大会サブテーマ、提言原稿要領について、くわしくご説明いたします。それに即した提言をお願いいたします。

また、プレゼンデータ（パワーポイント等）の提出は必要ありません。令和6年1月開催の「提言者研修会」での確認事項を踏まえた上で、作成していただき、来年度に提出となります。

何かとご多用とは存じますが、何卒よろしくをお願いいたします。

報 告 先 全公教研究大会高知大会事務局までメール添付にて報告
メールアドレス kochi@kyotokai.org

提言原稿報告期限 令和5年11月24日（木） 厳守

*今後の日程

- ・令和5年9月11日（月）提言者への執筆説明会 《オンラインで》
- ・令和5年11月24日（木）提言原稿（A4版2枚）のデータ締め切り
- ・令和5年12月1日（金）高知大会事務局が取り集めた原稿データを全公教へ送付
- ・令和5年12月4日（月）全公教の検討・審査の始まり
- ・令和6年1月5日（金）全公教の検討・審査の終わり
- ・令和6年1月20日（土）提言者研修会 《オンラインで》
- ・令和6年5月中旬 提言原稿最終提出
- ・令和6年7月初旬 パワーポイント提出
- ・令和6年8月1日（木）全公教研究大会高知大会2日目分科会にて提言

※なお、9月執筆説明会、1月提言者研修会については、後日お知らせします。

高知県小中学校教頭会 事務局
〒781-2120 高知県吾川郡いの町枝川2410-7
中部教育事務所3階
TEL 088-881-2393 / FAX 088-881-2635
e-メール kochi@kyotokai.org

サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について

1 大会主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

(第 13 期 全国統一研究主題 2 年次)

<キーワード> : 自立・協働・創造

[サブテーマ] : 夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進

2 高知大会のサブテーマ

第 13 期 2 年次に当たる高知大会は、前年度の石川大会の研究の成果と、第 13 期全国統一主題及びキーワードの趣旨を踏まえて、サブテーマを「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」と設定した。

私たちが生きているこの社会では、これまで以上にグローバル化やデジタルトランスフォーメーション (IT がもたらす変革) が進んでいる。また同時に、少子高齢化や地球環境問題などの多様な課題が進行しつつあり、先行きが不透明で予測困難な時代である。そのような高度化・複雑化する諸課題への対応をしながら、私たちが望む未来を私たち自身が示し、創り上げていくことが求められるようになる。

開催地である高知県は、少子・高齢化が進み、若者の県外流出等が過疎化の原因となり、小規模校の統廃合が進んでいる。また、都市部と中山間地域の教育環境が大きく異なり、それぞれに応じた地域の教育力を維持することが困難である。今後、地域の教育力を向上させていくためには、郷土への愛着と誇りをもち、グローバルな視点で高い志を掲げ、文化・コミュニティ活動等の分野で、地域の将来を担う人材が求められている。

こうした状況を踏まえ、学校は、地域社会の様々な機関等と連携することで多面的に子どもたちを育成することが望まれる。学校内外において、生涯を通じて学び成長し、主体的に社会の形成に参画していくなかで、様々な立場の人々と共生する社会を実現できる子どもを育てていきたい。そのためには我々副校長・教頭は、チーム学校の柱として現状を適切に分析して課題解決の方向性を見極め、他の教職員や地域とのコミュニケーションを基に目指すビジョンを共有しなければならない。そして、現状に満足しないで志をもってさらに高め合うことができる環境を創り出し、共に学び続けることで、成長できた喜びを実感できる教職員集団を育てていきたい。社会に出て自立して生き抜いていくために必要な資質・能力である「未来を切り拓く力」を育み、子どもと共に歩む教職員集団として「魅力ある学校」を創り上げるために、わたしたち副校長・教頭がどのように関与し、具現化していくか、追究していきたい。

3 高知大会研究協議の視点

(1) 「未来を切り拓く力を育む」学校教育を考える

高知大会においては「未来を切り拓く力を育む」ことを「協働して未来を創る子どもを育成する」ととらえる。

学校では ICT の活用により、個別最適な学びが推進されていくなか、教師と学習者、また学習者同士が共に関わり合いながら成長することの価値や、学校内外で様々な人と直接関わる社会体験等がもたらす教育効果について、あらためて認識を深めることが重要である。そのためには、自然体験活動、スポーツ、文化芸術活動、異文化交流、地域社会への参画など、オンラインでは経験し得ないリアルな学びも大切にしていかなければならない。

副校長・教頭としてリーダーシップを発揮しながら「協働して未来を創る子どもを育成する」を進めていくために、どのような具体的な方策や取組が有効か、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。

(2) 「魅力ある学校づくり」を考える

高知大会においては、「魅力ある学校づくり」を創るため、以下の要素が不可欠だと考える。

① 教職員が地域とのコミュニケーションを基に目指すビジョンを共有する学校

② 現状に満足しないで志をもってさらに高め合うことができる環境を創り出し、共に学び続けることで、成長できた喜びを実感できる学校

③ 子どもと教職員、地域がやる気とやりがいを実感することができる元気溢れる学校

これらのことを達成していくために、わたしたち副校長・教頭が学校現場においてどのようにリーダーシップを発揮し、具体的な方策や有効か、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。